

主 題：神の方程式2

聖書箇所：コリント人への手紙第二 9章6－15節

先週から、私たちは「献金について」、「ささげ物について」、「私たちが与えることについて」学んでいます。この学びをしている中で、ある物語を読みましたが、それはこのような内容でした。

『ある一人の王様が、ある日、自分の治めているその町へと出かけて行きました。すると、その町角の道端に一人の物乞いが鉢を持って人々からあわれみを乞うていました。そこを通りかかった王様を見たこの物乞いは、王様に向かって「どうぞ、私に恵んでください」と言います。王様はその物乞いの顔を見ながら「いや、あなたがあなたの持っている物の中から私に何かをください」と言いました。突然、そのようなことを言われた物乞いは非常に驚いて、そして、仕方なくその鉢の中から何か与えるものがないかと探しました。彼が見つけたのは米粒二つでした。彼はそれを王様の手の平に渡したのです。この話の終わりはこのようなものでした。物乞いがその日の夜、住まいに帰ってその日得た物を確認すると、彼が持っていた鉢の中には二粒の金が入っていました。彼は持っていたものをすべて王様に差し出せばよかったと言ったと。』

この世は、私たちに対して、もし、私たちが豊かになりたいなら、持っているものを一生懸命自分のもとに保ち続けなさいと言います。けれども、この今の話のように、神が私たちに言われることは「あなたが豊かに与えるなら、あなたは神からの豊かな報いを受ける」ということです。神はこの世と違った計画を持っておられます。神は私たちが私たちの所有物を神のためにささげるときに、豊かな報いとして、すばらしい報酬を与えてくださるのです。もし、この物乞いが鉢の中に入っていたすべての物をささげていたなら、彼は鉢一杯の金を得ていたことでしょう。神は私たちが毎日の生活をして行く中で、お金が必要だということはよく分かっておられます。そして、神は実に、私たちがそのお金を豊かに得、それを神の前に正しく使って行くことを求めておられます。もちろん、神は聖書の他の箇所でも、私たちが神の前にしっかり働くことを教えています。また、私たちが賢く蓄えることも教えています。けれども、同時に、神は私たちに一つの方程式を与えてくださっているのです。私たちがどのように地上において豊かに生きて行くのかという、そのための方程式です。

先週、私たちはそのことを見ました。パウロはコリントの教会に宛てたこのコリント第二の手紙の中で、8章と9章の2章を割いて、貧しいエルサレムの信徒たちのために、彼らが約束したささげ物を確かに集めるようにと、その励まし、勧めを与えています。その中で、私たちはこの9章の6節から、神は私たちが豊かになることを望んでおられること、その原則とその方法を見て来ました。パウロはこのように教えています。

☆繁栄への方程式

1. 与えることの原則

「少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」(9:6)、この非常に単純な原則は、私たちが豊かに与えるなら、私たちは豊かにその報いを受けるということを教えているのです。

2. 豊かに与えるその方法

その原則を伝えた後パウロは私たちに、具体的にどのように与えるべきなのかということをお話しました。7節「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」と、実は、与えたくないけれどもしようがないから与えると、それゆえに、心のうちに苦しみを覚え、悲しみを覚えながら与えるのではない。また、周りの人の目を気にして、その外的なプレッシャーのゆえに与えるというのでもなく、一人ひとりが自分の収入に応じて、自分で決めた額を喜んで豊かにささげることが神は求めているとパウロは教えたのです。

具体的に、それはどのような姿なのかを、先週、マケドニアの教会の模範を通して学びました。8章の前半部分にそのことが記されていました。彼らは困難の中貧困の中にあって、必要を満たすために、神の恵みが与えられていたゆえに、喜んで犠牲的に、パウロに「どうか、ささげさせてください」とお願いまでして、その必要に答えようとしていたのです。

私たちは今日、先週に続いて、裕福になること、成功するための神の方程式を見て行きます。今日、私たちはこのことに関して最も大切な部分を学んで行きます。そして、皆さんに、特に、このことをしっかり考えていただきたいのです。なぜなら、今日これから皆さんにお話しすることは、皆さんの生活を変えます。この真理は、皆さんが持っている信仰にチャレンジします。皆さんが神が求めるように与

えたいとそのように願うように、皆さんを変えることが出来るはずです。そして、何よりも皆さんがそうするときに神が大いに喜んでくださるのです。今日、私たちはこれまで学んだ「原則」と「具体的に与える方法」に加えて、神が与えてくださっている約束、また、神の目的、そして、そこから生まれて来る結果、または副産物というものを見て行きます。神は皆さんを豊かにしたくてしようがないのです。皆さんに富む者になってほしいと願っておられます。問題は私たちが神が言われているその方法をしっかりと理解して、それを喜んで、神の前に忠実に、神を信頼して為し続けるかどうかです。神は私たちにそのようにしなさいと言われます。その祝福をぜひ受けなさいと言われます。そして、パウロはそのことを私たちに忠告してくれるのです。もう一度Ⅱコリント9：6－15を見ましょう。

「6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりです。10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。15 ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

3. 神の約束

パウロはまず原則を告げました。そして、私たちがどのようにささげるべきか、その方法を教えた後、私たちに「約束」を示してくれます。私たちが豊かに与えたときに、どのようなすばらしい約束が与えられているのか、そのことをパウロは私たちに告げるのです。実は、この約束こそがまさに神が私たちに報いてくださる豊かな刈り取りなのです。私たちがより豊かに与えるとき、神はより多くのすばらしい祝福をもって私たちに報いてくださるのです。いったい、何が約束されているのでしょうか。パウロは二つの祝福があることを教えてくれます。そして、この二つのことを私たちが本当に正しく理解するならば、そのすばらしさを知るならば、私たちは「与えないこと」など考えることは出来ないと思います。

1) 特別な愛をもって報いてくださる 7b節

一つ目の約束は、神は私たちに特別な愛を持って報いてくださるということです。7節の最後「**神は喜んで与える人を愛してくださいます。**」、喜んで与える人がどのような人かはすでに見ました。先ほども言った通りです。この人は「いやいやながらでなく、強いられてでもなく、自ら進んで、喜びのうちに惜しむことなく、それゆえに犠牲的に捧げる人」でした。パウロがここで非常に直接的にシンプルに明確に教えていることは、このように喜んでささげる人、喜んで与える人を神が愛してくれているということです。別の言い方をすれば、私たちがこのように喜んで与えるべきその理由は、神の特別の愛がそこにあるからだということです。私たちはよく知っています。神は私たちが愛して下さっているということ。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。**」(ヨハネ3：16)。それゆえに、神はこの世を愛しておられます。でも、この世の中であって、神が特に愛をかけている人たちがいます。それは神のものとなり、神の民として、神の家族として受け入れられた私たちです。救われた私たちに対して、神は特別な愛をもっておられます。すべてのことを益としてくださり、私たちがその救いの初めから救いの終わりまで、永遠の終わりに至るまで、必ずすばらしい祝福を受けるように、神は特別な愛をもってクリスチャンに接して下さっているのです。そして、そのクリスチャンの中でも、神が特別に愛する人たちがいると言います。パウロは「**喜んで与える人を愛する**」と言います。

ここでパウロは「**愛する**」ということばに、私たちが最もよく知っている「愛」ということばを使います。ギリシャ語の「アガペ」ということばです。その動詞形です。この「愛」は神が御子をお与えになったその愛です。神が私たちクリスチャンに対して愛をもって接して下さるその愛です。その愛が特に「**喜んで与える人**」に示されるのです。つまり、パウロは神は神の前に喜んで与える者たちに、すべての信徒の中で、いや、全人類の中で最も大きな愛を与えて下さっている、特別の愛をもって接して下さると言うのです。

私はヨハネの福音書を読むとき時々思います。ヨハネは自分のことをヨハネの福音書の中でどのように呼んでいますか？自分の名前は出ませんが、特定の呼び方をします。それは「**主が愛された弟子**」です。もしかすると、ヨハネがこのことばを大胆に使うことが出来たのは、彼以外の十二弟子が、彼がこのヨハネの福音書を執筆したときには、すでにみな天に召されていたかもしれません。なぜなら、もし、私たちが同じようにヨハネとともにイエスのもとにいたなら、イエスがヨハネだけを愛していたと言う

なら嫉みませんか？でも、それは事実だったのです。それはイエスが十二弟子を愛さなかったということではありません。イエスは十二分に弟子たちみなを愛されました。3年半の間、彼らは寝食をともにし、彼らのためにその人生を費やし、教え導き続けて来られました。けれども、ヨハネに対してイエスは特別な愛情を示されたのです。それゆえに、ヨハネは最後の晩餐のときに、大胆にもイエスの胸元に顔を近づけることが出来ました。それゆえに、十字架の上で、イエスが今まさに息絶えようとしているときに、イエスはヨハネに「わたしの母を頼む」と言われました。皆さん、もし、私たちがこの十二人の中のだれかになれると言うなら、願わくは、このように主に特別な愛を注がれる者になりたいと思いませんか？神から、イエスから特に愛された人、何よりも不思議なことは、聖書の中にこのように記されている箇所は他に見ないことです。特定な行動に対して、神の特別な祝福がこのように記されている箇所は、他に一つもないでしょう。けれども、私たちが「神さまから特に愛された者です」と大胆にそのように言いたい、そのような愛を受けたいと願うなら、皆さんにできることが一つあります。皆さんが喜んで与える者になることです。喜んで与えることを学び、そして、喜んで与え続けるようになると、神からの特別の愛が皆さんの上に大いに臨むのです。クリスチャンの皆さん、その愛を受けたいと思いませんか？「神が愛した信徒」とそのように呼ばれたいと思いませんか？パウロは皆さんがそうなれると言います。なぜなら、神は喜んで与える者を愛されるからです。

2) あふれるばかりの恵みをもって報いてくださる 8節

神が特別の愛をもって報いてくださるだけでなく、二番目の約束は、神は豊かに喜んで与える者に対して、あふれんばかりの恵みをもって報いてくださるということです。神の特別な愛が与えられるだけでも、私たちが与えることの十分な動機になるのですが、それと同時に、神はすばらしいもの、あふれるばかりの恵みを備えてくださると言うのです。8節「**神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。**」、ここには明らかな強調があります。パウロは何度も「すべて」ということばを使っています。「**あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、**」「**すべての良いわざにあふれる者**」「**あらゆる恵みをあふれるばかり与える**」と。しかも、それは「常に」与えられていると言います。いつでもどんなときでも、あらゆることに関して、神の恵みが完全にあふれるように与えられると。何とすばらしい祝福でしょう！確かに、この世の人たちは私たちが与えるなら私たちの財は減ると言います。けれども、神の計算式では、もし、私たちがその総計を増やしたいと思うなら、まず、それを与えなさいと言います。与えるなら、常に、あふれるばかりの恵みが、あらゆることに関して、私たちに与えられると言います。神の方程式では10-5は5ではないのです。神の約束は、私たちが私たちの財産から与えることによって引くと、そこにはその総計が増え続ける、増し加わるというのです。なぜ、そのようなことが起こるのでしょうか？計算上は10-5は決して15ではありません。当然のことです。ですから、パウロは言います。神は「**できる方です。**」と。私たちは「それは無理です！与えるなら減るでしょう！」と言います。でも、神は「わたしにはそれは可能なことです」と言われます。「**あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方**」こそが私たちの神であるとパウロは言います。パウロは神の全能性に焦点を当てているのです。この地上において、自然界において、私たちがもっているものを与えるとするなら、それは確かに失うことです。けれども、霊的な真理において、神の前に与えて行くことはこれ以上ない豊かになるための方法だと言うのです。

神は私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて、豊かに施すことのできる方であると、パウロはエペソ3：20で言っています。「**どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に**」と。皆さん、このことは信仰の問題です。皆さんは神がこのことのできる方だと信じますか？そのような確かな信仰を持つゆえに、たとえ、困難なことがあっても貧困の中にあっても、マケドニアの兄弟姉妹たちのように、「私はこの必要のために喜んで愛をもって犠牲的にささげます」と言いますか？神が約束してくださっているからです。それとも「どのように考えてもそれは無理でしょう」と言って、神の約束は無理だとして与えることを拒みますか？問題はそこです。ダニエルの三人の友人たちが火の燃える炉に投げ込まれそうになったとき、彼らは言いました。「私たちの仕える神は、火の燃える炉の中から私たちを救い出すことができます」と。ローマ4：21にはアブラハムが何を信じたのかが書かれています。「**神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。**」、イサクがささげられました。アブラハムはなぜイサクを喜んでささげたのでしょうか？ヘブル11：18-19にそのことに関してこのように記されています。「**神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、：19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。**」と、今だかつて死者がよみがえったことを見たことはないけれど、神は約束を成就する方であることを確実に信じたゆえに、彼はイサクを通して子孫が海の砂のように、空の

星のようになることを疑うことなく、たとえ、イサクが殺されることになったとしても神はその約束を成就されることを信じて喜んでイサクを祭壇につけたのです。

なぜ、人々は神の前にささげないのか、その問題はまさにここにあります。神が願っておられるように、なぜ、喜んで与える者にならないのでしょうか？それは人々が神の約束を十分に信じていることがないからです。「確かに、神は約束されています、よく分かっています。」と言いながら与えることを躊躇しているのは、神が私たちに豊かに与えてくださる方であると考えているのではなく、神は私たちから奪い取る方であると考えているからです。けれども、神は私たちに豊かに与えることができる全能の方です。もし、私たちが神を「奪い取る方だ」と考えているなら、私たちはいつも与えることに関して、それを「いやいやながら」するでしょう。神は豊かに与えてくださる方であると考えているなら、与えることは辛いことではなくなります。ささげることはいやなことではなくなります。皆さんは、神は約束を守る方だと信じておられますか？神はこの約束を私たちに全うしてくださる方であると考えておられますか？パウロは言いました。「あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」と。神はすべての恵みをもっています。恵みの根源は神です。その神が喜んで与える者にその恵みをあふれるばかり豊かに注いでくださると言うのです。

けれども、この「あらゆる恵みをあふれるばかり与える」とはどういう意味でしょうか？皆さん、注意して聞いてください。大切なところです。このことがまさに、私たちがどのようにすれば豊かになることができるのかという秘訣です。パウロはこう言います。「常にすべてのことに満ちたりて、」と。これは単なる霊的な祝福だけではありません。この地上でのことです。神は「常にすべてのことに満ちたりる」ようにしてくださるのです。ここでカギとなることばは「満ちたりる」ということばです。このことばは「自己満足、自立」と訳すことができます。つまり、自分で満足して自分の力であらゆることのできる状態を表わしています。独立した自立した状態に満足することができる、そのことです。パウロがここで私たちに教えていることは、ありとあらゆることにおいて私たちが満足し自立することができるような状態に、神がしてくださるといことです。自分の力でそのような状態に達するのではなく、神がそのことを私たちのために為してくださるといのです。神が私たちが豊かに与えるときに報いてくださるその収穫は、私たちがあらゆる状況にあって、私たちが主の前に「私は満ち足りています」と言うことができる、そのような状態に置いてくださることです。パウロはこの満ち足りるを知っていました。ピリピ人への手紙4：11-12にそのことが記されています。「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。：12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」、その彼はピリピ4：19でピリピの人たちのすばらしい献金についてこのように言っています。「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいませ。」と。神は私たちの必要を備えることができる方です。いや、必要以上を私たちに備えてくださる方です。だから、マケドニアの信徒たちはパウロに豊かに与え、困難の中にあつたエルサレムの信徒たちのために、豊かにささげ続けたのです。ここでパウロが教えていること、神の約束は「私たちが豊かに蒔くなら私たちは豊かに刈り取る」、そして、その刈り取りには神からの特別な愛と、神からの豊かな恵みがあるという、そのことです。私たちが神の方程式に沿って豊かに蒔くなら、私たちは常に満足のうちに人生を送ることができるのです。マケドニアの教会の人たちが困難の中、貧困の中、犠牲的に、多分、自分たちの生活費を削って巨額の献金をエルサレムの信徒たちのためにしたことは、神が彼らに満ち足りる恵みを与えられたゆえに、彼らに欠けたところは何一つなかったからでしょう。神の約束はそこにあるのです。「あなたが豊かに与えるならわたしはあなたに必要を備え続ける、特別な愛をもってあなたに接するから、私の恵みはあなたの上にあふれるようにある」と言われます。このような約束が本当にあるなら、皆さん、ささげたくないですか？

4. 神の目的

ここで、私たちは最も大切なところを見て行きます。「目的」です。なぜ、神は私たちが「豊かに蒔くなら豊かに刈り取る」と言われるのでしょうか？何のために神はどのように豊かに返してくださるのでしょうか？その目的が8節に記されています。「すべての良いわざにあふれる者とするために」と。多くの場合、私たちは神に与えるなら神は豊かに返してくださる、それなら私はもっといい生活ができる、自分のためにお金を使うことができると考えるかもしれません。そのような思いをもって豊かにささげようとすることがあります。「得るために与える」というのは、ちょうど、未信の方々が神社などでしていることと同じです。それはクリスチャンのささげ方ではありません。聖書的なささげ方ではありません。そのことをパウロははっきりと示しています。皆さん、神が豊かに返してくださるのは、豊かに与えてくださるのは、私たちが自分のために使うようにというのではありません。それをもって私たちが「すべての

「**良いわざにあふれる者と**」なるためです。もう少し簡単に言うなら、神は喜んで与える者たちに大きな収穫を与えます。その収穫をもってより喜んで与える人は益々喜んで与えるようになるということです。そうすることによって彼の良い働きは益々大きなものとなり、益々広く広がって行くのです。皆さんが与えるなら神はそれを豊かに返してくださいます。それゆえに、皆さんは益々豊かに与えます。それが何よりも豊かに喜んで与えようとする者の願い、心だから、よい働きをもっとして行きたいと願うから、それができるように神は備え続けてくださると言うのです。真の、神に喜ばれる与え方をする人は、自分の財を築くためではなく、常に、どうすれば人々の必要を満たして行くことができるのかを考えて生きています。それゆえに、多く持てば持つほどに、その人は必要のために多く与え続けるのです。

パウロは決して新しいことを教えていたのではありません。それゆえに、9節で詩篇112:9のみことばを引用します。9節「**この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。**」と書いてあるとおりです。ここで「**散らして**」というのは蒔くことです。その財を蒔く人はすばらしい祝福が待っているということです。詩篇112:9「**彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠に堅く立つ。その角は栄光のうちに高く上げられる。**」、貧しい者へ惜しみなく与えるその人は、永遠にその義がその人の上に留まるのです。多くの人々にあふれるばかりにあわれみを示す人は、その与える行為の中に自らの義を確立し、神を信頼し神に従って行こうとしているゆえに、豊かな霊的実を刈り取るのです。神は皆さんが益々神に似た者になってほしいと願っておられます。この地上にあって、神が私たちに願っておられることは、私たちが毎日新しく造り変えられて、主に似た者へと変わって行くことです。神の義を現わして、神の愛を現わして、私たちがこの地上での生涯を全うして行くことを神は願っているのです。私たちがあらゆる良い働きをして行くことによって、神が示してくださった私たちへのすばらしいわざを反映して行くことができるように願っています。だから、神は与える者に豊かに報いてくださるのです。だから、神の目的を私たちが全うして行くことができるように、神は豊かに蒔く者に豊かな刈り取りを与えられるのです。「**良いわざにあふれる**」ように。

10節を見てください。このように「**良いわざにあふれる**」ことが目的だったのですが、その目的を私たちが達成するために神はどのようなことをしてくださるのかが記されています。9:10「**蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、**」、実は、神は私たちに「種」を与えてくださるのです。私たちが蒔こうとするには蒔くための「種」が必要です。神は「**蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、**」、「わたしはあなたにその種を備えている」と言われるのです。では、いったい、私たちが蒔くその種は元々だれが備えているのでしょうか？私たちが稼いだもののでしょうか？私たちが作り出して得たもののでしょうか？その「種」は神が与えてくださったものだと言います。神だけが私たちの持っているものを備えることができるということです。もし、私たちがあらゆる所有物の所有者であると考えたら、私たちはきつと与えることに対して躊躇することが増えるのではないのでしょうか？もったいない、私のものだからと。けれども、実は、私たちは所有者ではないのです。単なる管理者なのです。神が私たちにすべてのものを備えてくださり、神が私たちにあらゆるものを与えてくださっていて、私たちはそれを神の働きのために、神の計画のために用いて行くことを管理する者なのです。そのように考えるなら、私たちは蒔くべきです。神が願うように蒔き続けるのです。それゆえに、与える、ささげるという行為に関して、私たちが自分自身に問い掛けることは、自分のお金をどれだけ主のためにささげることができるのかではなく、神のお金をどれだけ自分のために保つべきなのかということです。神の財産を私のためにどれだけ使っているのか、そのことを考えなければいけないのです。

問題は、私たちが神のことに与える方と考えるのか、奪う方と考えるのかです。神は私たちが持っている「種」をも与えてくださっている方です。神が与えてくださらなければ私たちは何ひとつ持っていません。このいのちさえも。しかし、私たちは残念ながら、多くの場合、神のことに自分の財を「奪う方」と考えているのかもしれませんが。神は与える方です。神は私たちに蒔く種を備えてくださいます。それだけではありません。神は私たちにすばらしい収穫を保証してくださっています。私たちが神の目的をまっとうするために、「**…それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。**」と。神は私たちに何かを求めるとき、私たちが必ずそれができるようにしてくださっています。神は私たちができないことを要求されません。だから、神が「**すべての良いわざにあふれる者とするために**」と言われるとき、それができるように備えてくださっているのです。「私たちが豊かに蒔くことができるように」、そのために神は豊かな収穫を保証してくださったのです。神が与えてくださったように私たちが与えるときに、私たちは神の性質を身に付けて行きます。それが義となって私たちのうちに確立し、それは永遠の祝福として私たちに与えられるものです。完全なる義として。このように私たちが神のすばらしさを反映して、神に似た者として生きて行くことは、私たちクリスチャンがみな望んでいることであるはずですが。この与えることに関して何がすばらしいのでしょうか？パウロは言います。喜んで犠牲的にささげること

だと。私たちは自分のために蒔くではありません。神のすばらしさが益々現わされるように、良いわざが益々あふれるように私たちは蒔きます。私たちはこの世に宝を積むのではなく天に宝を積むのです。このように神の前に豊かにささげ続けて行くときに、それが私たちの義として永遠に加えられるのです。私たちの受ける冠は大きなものに豊かなものになるでしょう。何とすばらしいことでしょうか。神は私たちに対して、主の御座に立ったときに言われます。「良くやった、何とすばらしい信仰者だ」と、そのことばが聞こえて来ませんか？私たちは言います。「いいえ、そんなことはありません。なぜなら、私がこのように与え続けることができたのは、何よりもあなたが私に種を与えてくださったからです。それ以上に、あなたがその種を用いてより豊かな収穫を与えてくださったから、私はそれが出来たのです。あなたは何とすばらしい方でしょうか」と。皆さん、主のためにささげたくはありませんか？与えたくありませんか？神はこのようすばらしい約束をくださって、このようすばらしい目的を与えてくださっているのです。それを達成するために、こんなにすばらしい約束、保証を、その備えを私たちにしてくださっているのです。

5. 神の結果

豊かに蒔き、喜んで与える者となったとき、そこにはどのようなすばらしい結果が待っているのでしょうか？もちろん、約束として、私たちは神からの特別な愛を得、あふれるばかりの恵みを受け、豊かな収穫を得て、益々与えて行く者になるのですが、そこには副産物がたくさん出て来ます。

1) 益々豊かに与える者になって行く

11節「あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、」、たとえ、今、私たちが「惜しみなく与える」者でなかったとしても、私たちがパウロが教えるように、豊かに喜んでマケドニアの信徒たちのように与え続けるなら、私たちは「豊かに、惜しみなく」与える者になって行くと言うのです。より豊かに与えたいと言う者へと変わって行く、そのように成長して行くと言うのです。

2) 神への感謝が起こる

11節の後半「…それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。」、人々の必要が満たされて行くとき、そこには間違いなく、感謝が生まれて来るでしょう。神が求めているように、私たちが与え続け、神の働きがそこで守られ続け、それが益々発展して行くなら、多くの人たちがそのささげ物によって、すばらしい祝福を受け、それゆえに、神への感謝が益々増し加わって行くのです。多くを与えるなら神がより多くを報いてくださいます。それをなお与え続けるなら、益々神の働きが支えられ、多くの人々が神の恵みを受け、神への賛美と感謝があふれ出て来るのです。

3) 必要が満たされる

12節「なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。」、これはコリントの人たちが今準備をしている、貧しいエルサレム教会の信徒たちへの献金のことです。必要があるから与えましょうと、当然のことです。豊かに与えられるとき間違いなく必要は満たされて行くでしょう。喜んで犠牲的に惜しみなく与える人が増えるほど、必要はより早くよりの確に満たされて行きます。私たちは神への礼拝として神に喜ばれるようにささげ物をします。神はそれを用いて人々の必要を満たしてくださるのです。マケドニアの教会は熱心にそのことを行なったし、皆さんも自分自身の生活の中で、その生涯の中で、そのように人々が必要を満たしたことを見ることが出来たかもしれません。私はそのような経験を多くしました。この教会においても、そのようなことは多くあります。財政がどうなるのかと言いつつも、神は年度末に必ずその必要を備え続けてくださっています。

4) 神の働きを明確に見ることができる

喜んで与える者が犠牲的にささげ物をするときに、そこには人の変化があり、感謝と賛美が生まれ、必要が満たされる、そして、それだけでなく、神がいかによい働きを為しているかが明確になると言います。神が人々の人生に働いておられることを具体的に見ることができるのです。13節にそのことが記されています。「このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。」と。コリントの教会は大変な状態でした。町は不道徳と不品行に満ちて教会の中は混乱していました。コリントの町は当時、人々から不道徳の代名詞として使われるほどでした。残念ながら、教会はこの町の状態を反映しているようでした。エルサレムの教会の人たちは、彼らが本当に救われているのだろうか悩んだことでしょうか。実際に、パウロはこのコリント人への手紙第二の中で、あなたがたは信仰に立っているかどうか自分自身を試し吟味しなさいと、厳しいことばを使っています。Ⅱコリント13:5「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか。——あなたがたがそれに不資格であれば別です。——」。救われているのかどうか、そのような神の働きが本当にあったのかどうか、ところが、13節で

パウロは「このわざ…」、つまり、ささげ物を「証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順である」ことが分かると言っています。彼らが確かに救われていることが、この豊かに犠牲的に喜んでささげることを通して、明確に示されると言うのです。また、人々のうちに働いて、大きな必要すらも満たすことができるような、すばらしいささげ物が為されていることが分かる、神の働きの証拠になると言います。私たちは神が与えてくださったように与えることを求められています。なぜ、そのようにできるのでしょうか？私たちが神のものと変えられたからです。神の愛を知ったから私たちはその愛をもって人を愛することができるようになったのです。それなら、このように具体的な形で、コリント教会の人たちがエルサレム教会の人たちに愛を示すなら、それはまさに彼らが神によって贖われた者であることの証明以外の何ものでもないのです。だから、彼らは神のすばらしい働きを見ることができたのです。私たちも同じです。豊かにささげるときそこには神の働きの明確に見えます。不可能だと思われるような事柄に対して、私たちが必要を満たすために喜んで惜しみなくささげるとき、私たちはそこに神のすばらしいみわざを明確に見て取ることができるのです。

5) すばらしい交わりがある

14節「また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。」、人々は祈るようになり、そこには「交わり」が起こります。親しみが湧いて来ます。なぜなら、同じ主を信じる兄弟姉妹であることが証明されたからです。まして、大いなる関心のもとにその必要を満たそうと、熱心に犠牲的にささげているその姿を見るなら、親しい交わりが生まれて来ます。神は友を与えてくれると言います。ヤコブは言います。「**義人の祈りは働くこと、大きな力があります。**」と（ヤコブ5：16）。

6) 神に似た者へと変えられる

パウロは15節でこの献金の話を終えますが、とても不思議な終わり方をしています。15節「**ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。**」と。原文では「**彼の賜物**」となっています。これは明らかに、コリントの人たちの献金のことではありません。「**彼の賜物**」とは神が与えてくださっているギフトです。「**ことばに表わせないほどの賜物**」とは一つしかありません。私たちの救いのために与えられた御子イエス・キリストです。パウロは言います。神に感謝します。こんなにすばらしい賜物を神は私たちに与えてくださったからと。パウロはそのことを考えていたのです。イエス・キリストを通して与えられる永遠のいのちというすばらしい賜物以上にすばらしい偉大な賜物はありません。神はこの賜物をどのように私たちに与えてくださったのでしょうか？Iヨハネ4：10-11でヨハネはこのように言いました。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。：11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。**」、このような神を私たちは知ったゆえに、私たちも同じように、互いに愛し合わなければいけないと言うのです。神は惜しんでいやいやながら強制されてわずかな分だけ与えたのでしょうか？パウロは言います。もし、私たちが神が求めるささげ方をし続けるなら、私たちはまさに神が私たちに御子イエス・キリストをささげたように、豊かにささげる神のすばらしさを反映する者になることができます。私たちが与えることは私たちに与えてくださった主を証することです。それなら、皆さん、このようにささげたいと思われませんか？

皆さん、コリントの人たちがこの後どのようになったかご存じですか？彼らはささげたのでしょうか？そのことはローマ人への手紙15：26-27に記されています。「**それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醸金することにしたからです。：27 彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。**」、彼らは確かにささげました。彼らはささげようと決めました。そして、パウロが来るまで毎週しっかり献金をして、このささげ物のために準備をしたのです。神はそれを豊かに用いてエルサレムの教会を祝されました。

私たちが生きているこの世にあって、私たちは自分たちが持っているものを保つようにと教えます。けれども、コリントの教会の人たちは与えることを学びました。喜んで犠牲的に自ら進んで、惜しみなく与えることを学んだのです。それはまるでイエスが言われたように「**受けるよりも与える方が幸いである**」ということを経験したということです。私たちはもし、神が求めるように豊かにささげるなら、豊かな収穫を祝福のうちに得ます。

当時、まだ22歳だったジム・エリオットという宣教師は、1949年10月28日の日記の中のこのようなことばを記しました。「**保つことのできないものを得るために一生懸命それを守ることは愚かなことである。逆に、自分が保つことのできないものを永遠に失うことのないもののために、喜んで捨てることは愚かな者ではない。**」と。彼は1952年、25歳の若さで殉教しました。彼の人生はまさにこのような生涯でした。永遠に目を向けているゆえに、永遠に保つことができるもののために喜んで

この地上のものを与え続けたのです。自分のいのちまで惜しむことなく…。ハドソン・テイラーという有名な宣教師、中国で宣教をした宣教師ですが、彼は犠牲的にささげ続けたその人生の最後にこのように言いました。「私は一度も犠牲を払ったことがない。」と。どうしてそのように言ったのか、彼の息子はこのように説明しています。「それはまさにその通りでした。確かに、彼は人から見ると犠牲を払い続けたかのように見えるかもしれないけれど、彼は正しいことを言いました。なぜなら、神が与えてくださったその犠牲に対する報いは、それを犠牲と感じさせないほど余りにも大きくすばらしいものであり続けたから」と。

皆さんはどうでしょう？この世の永遠にもって行くことができないものを保つために、一生懸命、それを守ろうとしますか？それとも、永遠に保つことができるものを得るために、この世のものを神のために使い続けようとしていますか？豊かに与える者になりましょう。そこには神からのあふれるばかりのすばらしい祝福が待っています。願わくは、私たちがみなそのようになって、神の大いなるすばらしさを反映することが出来るようにと願います。